

Improvement in 5-Year Relative Survival in Cancer of the Corpus Uteri From 1993-2000 to 2001-2006 in Japan

井上, 修作

<https://doi.org/10.15017/2348700>

出版情報：九州大学, 2019, 博士（医学）, 課程博士

バージョン：

権利関係：Copyright © 2017 Shusaku Inoue et al. This is an open access article distributed under the terms of Creative Commons Attribution License, which permits unrestricted use, distribution, and reproduction in any medium, provided the original author and source are credited.



(別紙様式2)

氏名	井上 修作
論文名	Improvement in 5-Year Relative Survival in Cancer of the Corpus Uteri From 1993-2000 to 2001-2006 in Japan
論文調査委員	主査 九州大学 教授 馬場園 明 副査 九州大学 教授 萩原 明人 副査 九州大学 教授 江藤 正俊

論文審査の結果の要旨

申請者らは日本の地域がん登録資料を用いて医療の発展に伴う子宮体がん患者の生存率の変化を評価した。【方法】山形県、宮城県、新潟県、福井県、大阪府、長崎県の地域がん登録資料より、1993年から2006年までに診断された、合計8,562例の子宮体がん症例の情報を収集した。1993年から2000年を第1期、2001年から2006年を第2期と定義した。それぞれの期間でコホート法を用いて5年相対生存率を推計した。

Excess mortality model による評価では、第1期と比較して第2期の生存率は統計学的有意に改善していた[Excess hazard ratio (EHR) 0.785、95%信頼区間(95%CI) 0.705-0.873、 $P<0.001$]。層別化解析の結果、55-69歳の症例、すべての進行度の症例、類内膜腺癌の症例で統計学的有意な改善が認められた。特に、類内膜腺癌の症例では5年相対生存率が第1期の84.5%から第2期の89.7%に有意に改善していた(EHR 0.698、95%CI 0.560-0.870、 $P=0.001$)。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

なお本論文は共著者10名以上であったが、予備調査の結果、本人が主導的役割を果たしていることを確認した。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。